大連日記から　その 23

大連国際徒歩大会の日

5 月 16 日　木曜　天気晴れ

午前中の授業には出たが、どうも体調がおかしかった。前回の感冒に懲りて直ぐに守りに入った。薬の用意がなかったので、夕飯後、寮の受付で劉金柱さんから備えてあった風邪薬をもらった。

翌 17 日金曜日。やはり体調が良くない。ここは大事をとって学校を休み、ベッドに臥した。と言うのは、その週の日曜日、市内で開かれる「国際徒歩大会」と言う催しに参加予定だったから。翌 18 日、土曜日。風邪に典型的な倦怠感はなくなり、午後には新調のスポーツ・シューズを履いて、大学周辺を歩いてみた。南院側の静かな住宅地の中に「浴池」(浴場のこと)を発見。日本を出て以来湯船につかる機会がなかったので、そろそろ大きなバスタブが恋しくなっていた。受付でわずかなお金で入浴可と聞いて、今度来ますねと言ってそこを出た。この散歩でどうやら体調は回復して来た。そして 19 日。徒歩大会当日の日曜日がやって来た。天気はあいにく曇りで、明け方には雨もあったよう。しかし、10 ㎞の道のりを歩くには、日が差さないのは好条件と思われた。

出発を待つ遼寧師範大の留学生グループ

その大連国際徒歩大会。海外からの参加も多く、それで国際を冠しているとか。ここ数年は参加者が 30 万人を超える盛大なイベントになっている。2003 年から始まったので、この年は 17 回目となった。なぜ参加者が多いかと言うと、個人だけでなく企業や大学などの団体参加が多いからと聞く。この日の朝、大学の教学棟の前にはバスが乗りつけ、我々の班ももう一台の別のバスに乗り込

んだ。そして着いたのは、以前紹介した大連港の東側に新しくできつつある新市街の入り口、国際会議場の辺り。それにしても、我がクラスからの参加は五人と寂しいもので、おまけに男性は私一人だった。運動好きの金晨星と、同じくマラソンも嗜む日本からの稲垣さん。それに助理の晨露さんと言った面々。さらに、カナダから到着したばかりの牟花(ラファエル)は、直ぐに友達のいる別のグループに行ってしまった。全員が女子。晨星は本当に無邪気で、待ちに待った遠足の日がやって来たとでも言うのか、本当に楽しそう。半ば仕事のはずの晨露さんも、まんざらでない様子。そこへ、やはり日本からの木下さんが話しかけて来た。こちらは同じ世代の男性。日本から来て間もないらしく、何となくこのイベントにとりつく島がないよう。こちらも喜んでお相手する。

大勢の人がその未来的な景観の新市街を貫く大路を歩き始めていた。スタートのアーチはあったが、競技会ではないので、ぞろぞろとくぐってそのまま東へ。間もなく、今度は稲垣さんが先へと消える。彼女は半ば駆け足で最長の 20 ㎞のコースへと挑むと言う。大会途中に皆が連絡をとったが、お会いするのは翌日となった。地下鉄 2 号線の終点「海之韻」が見えて来た所で、新市街は終わり、それからは大連市の東端の海沿いを北から南へと向かう濱海路という舗装された山道を行く。この頃、他のクラスだった木下さんとも別れ、我々は金晨星と晨露さん、そして私の三人で行動。道は舗装されていたが、急な傾斜もあるので、ちょっと太めの晨露さんを、晨星と私は心配した。しかし、晨露さんは、なかなかのパワーの持ち主。三人は誰も遅れることなく、10 ㎞のコースを進んだ。ただし、本当に大勢の参加者が道を行くので、休憩スポットに立ち寄ってもトイレは長蛇の列。結局最後まで、トイレ無しで歩ききった。

10 ㎞のゴールは間近。沿道が美しいのは、この道が迎賓路だからだと思う

最後の 2 ㎞に差し掛かった所に十字路があり、交差する迎賓路という道を西へと入る。ここからは海沿いを離れて緩やかな丘の上り坂。ゴールは間もなくとなった。この道を逆に東へ行くと海に突き当たり、そこに中国政府の迎賓館がある。それで道の名が迎賓路なのだろう。沿道はやけに整っていた。それにしても、あいにくの曇天で、風光明媚なはずの濱海路からは海を見下ろすこともできなかった。そのため、後日、一人でもう一度ここを歩くことになった。

ゴールにはチェックポイントがあって、用紙にスタンプを押してもらい、これで終了。しかし、混雑を避けるため、我々を待つバスはさらに 1 ㎞も行った所に待機していた。それにしても我々は早い方で、なかなか他の学生達がやって来なかった。それでも、昼前には出発。12 時半には、今朝の教学棟の前まで帰って来た。晨露さんにお礼を言い、さて二人でお昼でもと誘ったが、晨星は用事があるとのことで、こちらも無理には誘わず、例の蘭玉街の食堂に出かけた。大変な思いをした訳ではないが、疲れが溜まっていた。例の「浴池」を思い出した・・・。

と言う訳で、午後に住宅街の一画にある浴池へと出向き、3 か月ぶりに湯船につかることができた。しかし、これも日本の銭湯とはだいぶ違うところがある。ロッカールームで、スイミングパンツをはいての入場だが、まずは大きなシャワールームの真ん中にベッドがあり、三助さんが男性のあかすりに精を出していた。壁際のシャワーがメインで三畳ほどの湯船はその部屋の脇にあった。しかも湯船は薬草でも入れているのか、幾らかの濁りがある。神経質な人なら、そのままでは入りたくないかもしれない。そんなことは言っていられない。というわけで湯船にざぶーん。待ちに待ったお風呂に浸かって良しとした。思い出多い一日となった・・・。

浴池（中国版銭湯）の建物の入り口正面　中は至って簡素だった